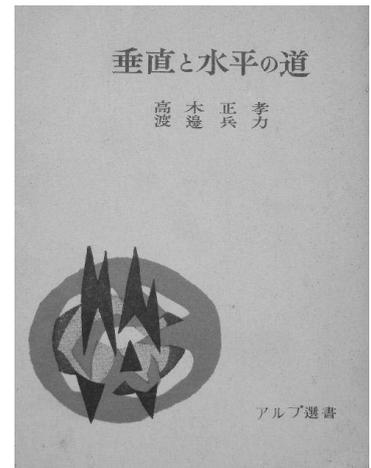


高木正孝・渡辺兵力著『垂直と水平の道』

著者の二人は、それまで未登の処女地であった谷川岳東面の岩場開拓に情熱を注いでいた成蹊高校山岳部のリーダー仲間で、昭和8年3月、一の倉沢本谷の積雪期初登攀をはじめ、谷川岳東面の登攀史に輝かしい足跡を残したクライマーである。同じ年の12月、一の倉沢・滝沢から国境稜線への登攀に成功した彼等は下山の道を失い、幽ノ沢に迷い込んで150メートルも切れ落ちている左股大滝の上でビヴァーク、折から襲ってきた雪崩にツェルトごと吹き飛ばされ、この大滝をダイビングして、僥倖にも大滝下の雪渓に無傷で着地し生還した経験をこの本に書いている。山岳史家で同じくクライマーであった安川茂雄は著書『谷川岳に逝ける人びと』の中で、この遭難のことを「谷川岳におけるアルピニストによる最初の遭難であり・・・運命の神の恩寵がなければ谷川岳遭難慰霊碑の最初に名前が刻まれたであろう奇跡的生還であった」と記している（一部筆者要約）。



学窓を出てからの二人は、進んだ道も前者は大学教授、後者は農林省の研究所員とそれぞれ異なり、また遠く離れて住むことになったので、山に同行する機会は無かったらしいが、この本は若かりし頃の登攀のあれこれや、人との出会い、山登りに対する考察、またお互いに離れた後で行った海外での登山などを、30年の歳月の後に纏めたものである。題名の「垂直」は国内外での登攀に、また「水平」は渡辺の第1回南極観測などに由来している。

高木正孝は、学術調査の途上マルケサス海域で若くして行方不明になったが、渡辺兵力は昨年（2005年）の日本山岳会の記念講演会（「語り継ぐ黎明期の登山・・・それぞれの山」シリーズ）で谷川岳から南極、ヒマラヤへの道を豊饒として語っておられた。90歳とのことであった。講演後、控室を訪れて、この本にサインを頂いた。几帳面な字で日本山岳会の会員番号（3029）も書いて下さった。他の著書『山・スキー・道』にもサインを頂いたが、こちらの方は驚いたことに「アレッ、こんな本書いたっけ？」と仰られていた。

先日、新聞の死亡欄に渡辺兵力氏のお名前があった。享年91歳。講演会でのお元気な姿からたった1年間で鬼籍に入られたことが残念でならない。比べるのも愚かであるが、私の父と同年で、逝去された日も1ヶ月違いであったので、余計に思い出が深い。合掌。

アルプ選書、1961年創文社刊。 （2005年9月 記）

[「山書の小溪」目次に戻る](#)